異界歩き

嶽裡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界歩き

【Ｎコード】
Ｎ５３０９Ａ

【作者名】
嶽裡

【あらすじ】
ファンタジーっぽい世界観の話です。

1

◆

――――こいつはまずいわねー。
サナリエは胸中で憂鬱そうに呟いた。
彼女がそう思うのも無理はない状況だった。
周りには彼女を取り囲む十人近くもの人影。いずれも――彼女自身も含めて――――このスラム街でよく見られるような、あまりよくない身なりをしている。そこにいる者のほとんどは刀剣や棍棒な度を手にしていてどう考えても友好的には思えない。とは言っても武器持ちはお互い様なのだけど。
だからと言っても、一対複数。
しかもこの人数差。何をするにしても複数側が卑怯になる数字である。
まあ、スラム街なんて治安も悪いからこんな状況はよくあることではあるが。
「あのさぁ。これってどういうこと？」
やれやれ、と言いたげなぞんざいな調子で彼女は言った。
周囲を取り囲む似たり寄ったりの恰好をした、いかにも「不届き者です」と言っているような連中。その中にいる一人に話しかける。
「バライさー。あたし、何かあんたらにこんなことされなくちゃならないのかしら？」
話しかけた相手はこの集団のまとめ役だ。
バライ、と呼ばれた男は、その子供には絶対に好かれなさそうな厳つい顔を不愉快そうに歪める。バライはこのスラム街にいくつかあるゴロツキ連中のグループのひとつをまとめている男だ。――――もっかのところ、サナリエと敵対中の連中である。
その頭領格が言う。

「そんな事は自分に聞け」
「そうねぇ……」
見に覚えがあり過ぎてどれの事か分からなかったりするサナリエ。
獲物の横取りから妨害行動まで色々とやったのである。
――言い訳するなら、ほとんどの場合は相手から喧嘩を吹っかけてくるのだ。こっちからしかけたことは、あんまりない。たぶん。
「ようはアンタが下っ端の手綱をきっちり握らないのが悪いんじゃない。うん、そうよ。結論、あんたたちが悪い。ったく、だいたい女ひとりにこの人数ってやり方が気に入らないのよ。無能の癖に姑息だなんて自慢にならないわよ？あーあー、アホらしいっての」
思いっきり馬鹿にしてせせら笑う。サナリエの見た目は十台半ばの活発そうな赤毛の少女なのだが、こういう生意気な仕草がとてもよく似合う。
「……！」
彼女を囲んでいた一人が激昂して彼女に殴りかかった。
鈍器で、である。
「あーあー、面倒くさい」
殺しかねない勢いで振るわれた凶器を彼女は軽いステップで回避。流れるような動作で逆にそいつの脇腹に拳を叩き込んで気絶させる。ばったりと倒れる名も無き雑魚。
「あらら、よわっちいのねぇ～？」
ふふん、と鼻で笑う。
「――！この……！」
周りの連中がさらに色めき立つ。馬鹿にされたうえに仲間がやられたのだ。怒るのも無理はないだろう。が、しかし。
「……よせ、お前ら」
バライが静かな声で言う。決して大きいわけでもない声だった、が、頭に血が上った連中は冷水をぶっかけられたかのように動きを止めた。
「ん～？バライ。どーしたの？もしかして女一人に臆病になっちゃ

った？」
この挑発にも彼はまったく反応しない。
「臆病でいいぜ。……なぜかお前はそこらの魔導士なんかより魔力を持っているからな。魔力は生命力でもある。つまりお前は常人離れした馬鹿力でもあるわけだ」
「はっ。小心者なのね」
サナリエはニヤニヤ笑いながらも内心で舌打ちする。
———やっぱりまずいわね、こいつは。
エリナスが苦く思ったのは何も人数だけのせいではない。このバライという男が出張ってきたことさえが一番問題なのだ。下っ端連中は馬鹿ばっかりだからいくらでもあしらう自信はある。だが、この男はそうにもいかない。
懐の中にある獲物の感触を確かめる。十年位前にあの屋敷から持ち出した数少ないもののひとつだ。特殊な加工が施してある短刀。
———女子供だと思って舐めてくれるほうがよっぽど楽だって言うのに。
内心を押し隠してニヤリと笑うサナリエ。
「その臆病の結果がこの人数？———舐めんじゃないわよ。あと二倍は用意しなさい」
「必要ない。———やれ」
声と同時に悪寒がした。
サナリエは他人より優れた本能に従って、とにかくその場から飛び退く。すると、さっきまで彼女がいた場所を爆発と高熱が襲った。
何かが着弾。光と熱。
彼女はゴロゴロと無様に転がって余波から逃れつつ、すばやく立ち上がる。
「ちょ……！冗談じゃないわよっ！？」
かわしきれずにちょっとばかり皮膚を焼かれる。とても痛い。
見渡すとバライの後ろに控えるように薄気味悪いローブを目深にかぶった誰かが立っていた。

――――導士崩れだ。
どっかから最近、そういう奴が流れて来たとウェルが言っていたのをサナリエは思い出す。
このハロレイというスラム街が三分の一を閉めるろくでもない街にはいろんな所からその街と同じくらいろくでもない連中が集まるのだ。だが、まさかそのロクデナシの導士崩れがバライの連中のところには入っているなんてサナリエは知らなかった。
魔導。魔法とも呼ばれる技術。
この世界では普遍的に使われる『技術』である。技術だから誰にだって魔導は使える。子供だってそれなりに教育を受けていれば夜に明かりを灯すことくらいはできるのだ。
――――でも魔導士の魔導はかなりヤバイ。
魔力を使うのはこの世界の住人にとっては手足の延長に近い。
歩いたり走ったりするのと同程度に人は魔導を扱える。ただし、『魔導士』はスポーツ選手と同じでその運動（能力）を訓練し、高めた連中だ。
導士崩れがぶつぶつと口元で何かを呟く。もちろん、魔導士がこんな時に呟くものなんか決まっている。サナリエはあまり詳しくはないがそれでもどんな現象が来るかは知っている。
「こんなヤツ用意してるなんて――――相手してらんないわっ！」
ばっ、と身を翻して導士崩れと反対側へ走る。
逃走経路上に突っ立っている木偶の坊を殴ったり張り倒したりしながら走る、逃げる。高熱が身体を掠めて皮膚とか色々と焼かれるが、立ち止まって追い討ちされるのはもっと嫌だ。
――――バライの連中、覚えてなさいよ！今度は全力でとっちめてやるっ……！
などと後になって思い直して自分で後悔しそうな安直ことを考えながら走る。

スラム街に蜘蛛の巣のように走る裏路地を走って逃げる。
普段なら絶対に追いつかれない自身があるのだけど、今は怪我もしているし相手の人数も多い。人数がさっきからまた増えたのだ。
「はぁ、はぁはぁ、……はぁ」
息も絶え絶えに走る。
――――下手を打ったなぁ。これじゃウェルになんて言われるのやら……。
気が動転していたのか知らない道に入ってしまったようだ。何処に自分がいるのか分からなくなっている。意識もちょっと朦朧としているような気もする。
――――ありゃ、そんなに怪我、ひどかったっけ？
ちょっと前から痛みを感じなくなったのだが、それは逆に危険なんじゃないのかと思う。フラフラと走る彼女には無数の傷が付き。魔導の現象によって傷つけられた場所には火傷に加えて毒素のようなものまで混じっていた。どうやらそういう殺傷用の魔導式だったらしい。
――――あー、倒れるー……。せめて、どこかに隠れなきゃ。
はっきり言って賭け以外の何者でもないが、目に付いた壊れかけの木造建築物の扉に手をかける。幸いなことに鍵に類するものが掛かっていなかった。すんなりと開く。
死にかけの身体を引きずってそこに入り込む。なんだか目まで霞んできた。
――――あれ？なに、ここ……？
何処へ行っても少なからず薄汚いのがスラム街のはずなのに、入った部屋は妙に清潔で、何かがとてもおかしい。見たこともない道具や何かがわんさとある。
――――幻覚かしら？
ちょっと本気で死を確信する。
不愉快な事に倒れる瞬間に思い浮かんだのは双子の兄の顔だった。

◆

「……うお？なんじゃこりゃ。――って、どういうことだ、ソオ」
「分かりませんか、主人。誰かが倒れているんですよ」
「いや、それは聞いてないし見ればわかるって。問題はなんで誰だか知らん人がここに倒れているのか、だ。この場所きっちりと防護はしてあるんだろうな？お前の管轄だぞ」
「きっちりやっていましたよ。心外ですね。ちょっと待って下さい――……ああ、なるほど」
「何を勝手に解析して納得しているんだ。――ま、いい。このままほっといて死なすのも寝目覚めが悪い。とりあえず治療でもしておくか」
「また面倒なことに首を突っ込むんですか？いいじゃないですか。別に。このまま自然に正しく腐敗させてあげましょう。なに、誰も文句など言うことはないでしょう」
「それじゃあ面白くないだろ？」
「――。……はぁ。また、それですか」
「はっはっはっ。――諦めろ」

◆

「――た、ですか。いい加減に……」
「馬鹿だな――――じゃないか――――……」
誰かの話し声をきっかけにして目が覚めた。
まず視界に入ったのは久しぶりに見た清潔な白。それがどうやら天

井らしいと気付くのに少し時間がかかった。頭がぼんやりとする。
「あー、う――――」
意味のない呟きが口から洩れる。
なんだか気分がいい。自分はどこかベッドか何かの上に寝ているらしい。姿勢が楽だ。しかもこのベッド、ふかふかしていて気持ちがいい。なんだか十年近く前に住んでいた場所を思い出す。
と、すぐ傍に誰かがいる気配。視界の中に顔が突き出されてきた。こちらが起きたのに気付いて顔を覗き込んでいるらしい。少年だった。自分と同じか少し上くらい。この辺では珍しい黒髪に黒目をしている。
「おー、起きた起きた。案外に早かったなあ」
にっ、と笑って少年が言う。
見下ろすようなすぐ近くにいるのにずっと遠くにいるような印象。
「え、あっ」
至近距離から見つめられてサナリエはハッとして柄にもなく慌てる。
慌てているサナリエの
様子が面白いのか少年はニタニタと笑っている。
「慌ててる慌ててる。いや、面白いな。うん」
「うっさい」
見知らぬ少年に言い返しながら自分の身体の状態を確認する。どうやら自分はものの良いベッドの上に寝かされていたらしい。念のために服装なんかもチェック。特に何かされた様子はない。ぺたぺたと自分の身体を触るがどこも痛くも痒くもない。
――――ありゃ？怪我してなかったっけ？
ふと浮上した不可解に首を傾げる。
「どうしたんだ、首を傾げて。――――まだ眠いとか？」
「違うわよ。――――って、ここどこ？」
改めて見回してみる。本当にスラム街なのか疑わしい清潔な部屋。用途の分からない道具がいくつも転がっているのがとても奇妙だ。部屋の中には少年と自分しかいない。

――んあ？もう一人いなかったっけ？声がしたけど。
「あー、どこって。知らなくて入ったのか。人の仮住まいに勝手に入り込んでおいて」
「勝手にって、鍵も付いてなかったじゃない」
「――付いていたはずなんだけどね。飛び切りのヤツを」
あーまったくやれやれ、などと肩を竦める少年。芝居かかった動作の後に言う。
「それで、いつになったら俺は君の名前を聞けるんだろうね？一応ながらも俺が君を助けてあげたんだから、それなりの誠意とかみせても罰は当たらないと思うよ」
「うーん、そうよねぇ。助けてもらったっぽいし。――あたしの名前はサナリエ。サナでもいいわよ」
「ん。よろしくー。あ、俺の名前は……燈耶颯梧（とうやそうご）……む、そうだなぁ。ソーゴとでも読んでくれ。あ、よかったらＳＴ（エスティ）と呼んでくれ」
「ソーゴ？エスティ？――ふーん。そうね、そのどっちかで呼ばせてもらうわ」
「そうしてくれ。それでサナリエはどうするんだ？目覚めたなら帰る？」
少年にそう言われて、いま自分が置かれている状況を思い出す。ここがどの辺か知らないけれど、バライの配下連中がサナリエを探してこの辺りをまだ走り回っているはずだった。
「助けてもらってこんなこと頼むのも気が引けるけど、――お願い、ちょっとだけの間、匿ってくれない？」
「ふん？」
言われて少年は考える。
――断れても文句は言わないけどね。
内心で言う。少年がどんな事情でスラム街（こんな場所）にいるのかは知らないが、誰だって面倒ごとは嫌う。もしここで放り出されても恨むつもりも無い。
「ん、了解した」

「やっぱり駄目かぁ、――――って、へ？いいの？」
「なんだ、藪から棒に。了解したって言っただろ」
「厄介ごとだよ？あたしに関わると大変かもしれないんだよ？」
自分で頼んだはずなのにそんな事を言ってしまうサナリエ。しかしそんな彼女に少年はにやにやと笑いかける。
「面倒ごとは大歓迎だ。いやいや、愉快愉快」
くっくっ、と笑う。この少年が本気でそんな事を言っているのだとサナリエは確信した。
「だから俺のことはいい。そっちだって断られるよりはいいだろう？」
「それはそうだけど。――――うーん。じゃあ、お礼を言うわ。ありがとう」
と言った所で、ぐぅ、と彼女のお腹がなった。
「……」
「……」
しばし気まずい沈黙。
「あう、……そういえば朝食を食べようと思ったときにさっきの厄介ごとがきたんだっけ」
良い訳のように慌てて言いながら顔を赤くするサナリエ。
「腹が減っているのか？」
にや、と笑いながら少年はからかうように意地悪に言う。
「別にいいわよ。気にしないよーに」
「ふーん？」
そうかい、と言いながらソーゴだかエスティだかよく分からない少年はこの奇妙な部屋の中にあった子供の背くらいの箱から何かを取り出す。
「ほら、飲むか？」
と言って何か金属の筒のようなものを手渡してきた。それを受け取ってまじまじと凝視する。
手の平に収まるくらいの円筒形のもの。なぜかこの物体はとても冷

たい。
――あの箱の中ってなにかの装置なのかしら？
「で、なにこれ？」
「飲み物。――こうやって、こう」
筒にあるとっかかりを引っ張って「カシュッ」と開くと少年は缶の中身を飲んだ。
「ん～」
サナリエは見様見真似（みようみまね）で同じようにしてみる。カシュッ。缶の中身を覗き込む。どうやら液体が入っているらしい。飲めるようになっているようだ。
――どうしようかしら？
と思うがこっちを害するつもりならとっくにやっているだろうし、何より好奇心に負けた。
こくこくと中身を飲み込む。……果実のように甘い。
「なんだか不思議な味ねえ。それに冷たい。――その装置って何？」
「物を冷たいままに保存しておくもの。――まあ一種の懐古趣味か」
「懐古趣味？」
「だってそうだろう？今の俺にはこういうものは本来必要ないんだから。もっと便利なものがたくさんあるのにわざわざ使っている。――ソォにぼやかれるのも無理はないか」
くっくっ、と意味の分からないことをいいながら笑うエスティ。さらに部屋の別の所からまた取り出してくる。今度は何かの包みだ。
「食事だ。腹が減っているんだろ？よかったら食え。まだ飲み物もある」
部屋の中央のテーブルに次々と色々と並べていく。そのどれもこれもが食べ物らしく。いい匂いを出している。いつのまにこんなに用意したのだろう、とサナリエは疑問を思う。
「うーん」

食べたい。なんか目覚めてからとてもお腹が減っている事を自覚する。
「でも、まだ聞きたい事があるし」
「食事しながらでも構わないだろうに、いらんならさげるぞ？」
「むぅ、――――頂きます。ええ、もらいますとも」
結局、彼女は食事にありつく事にした。

料理は見たこともないものが多かった。
どうやらエスティは自分の好みで食卓を用意したらしく、どれもこれも少し嬉しそうにパクついている。サナリエとしても不味いとは思わなかったので一緒に食べる。そもそもスラム街に住んでいる彼女はその気になれば大抵のものは口に出来る。とは言っても彼女にとっても食卓に並ぶ料理はどれも美味しいと感じた。
「……でさぁ。エスティってもしかして魔導士？」
「む？いきなりファンタジー含有量の多い質問だなぁ。――……あ、ここじゃ普通の質問か」
後半は声が小さくて聞き取れなかった。
「うん？違うの？」
「なんつーか。あーあーあー、そうだなぁ。――――うむ。似たようなものだな」
いかにも曖昧な表情で困ったように言う。何かこっちが無理な質問をして困らせてしまったような気がしてどこか後ろめたい。
「あ、そうね。スラム街（ここら）じゃ人の過去を詮索するのは行儀が悪いわよね」
何せ自分だって聞かれたら色々困るしねー、とサナリエは内心で呟く。
そういうわけじゃないんだけどな、と頭を掻くエスティ。ただ単にどう説明していいのかわからないだけだ、とか何とか小声で言う。
「で、もう一人はどこにいるの？」

「？」
「声はしたけど」
「えーと、あー。いたっけか、そんなの」
しどろもろに言うエスティ。何で知ってるの、というような困惑顔。
――――うわー、あやしい。
余計な詮索がどうのとか自分で言っておきながら好奇心を隠そうとはしないサナリエ。もとから好奇心は人一倍強いのだ。じろじろとエスティを眺める。
「あー、なんだよ」
「――――主人。もうばれています。それに隠す意味もそんなにありません」
と何処からか声がした。エスティの声ではない。男女不明の涼やかな声。穏やかで、そのくせに慇懃無礼と言う印象。
「誰？」
声の主を探してきょろきょろと部屋の中を見る。どこかに無理に隠れていない限りはわかるはずだった。
「んむー。誰よ、どこにいるの？」
「――――ここですよ、ほら」
声のする方へと目を向ける。エスティのいる辺りから聞こえた。エスティがふざけているのかとサナリエは思った。
「――――、え」
白蛇、だった。
とても綺麗な白蛇がエスティの首に巻きつくようにしている。――――その白蛇の背には蝙蝠のような羽がついていた。普通の生物ではありえない。
「おや、そんなに注視しないで下さい。照れます」
蝙蝠のような羽をパサリと小さく動かして言う。
蛇に蝙蝠、というのは人によっては嫌われやすい印象が強いが、その白蛇には気味悪さよりも神秘的な美しさのほうが目立っていた。
綺麗な鱗に、知性の窺える金色の瞳。

「えー、と。ねえ、エスティ？いま、あたしにはその蛇みたいなのが喋ったように見えたんだけど……」
「いえ、間違いではありませんよ」
ふふ、と笑みを含んだ優雅な口調で白蛇は言った。
「え、あ。うそっ……！『知恵ある獣』……？」
サナリエは驚愕と畏れと含んだ声で呆然してしまう。
……知恵ある獣。
聖獣とも魔獣とも呼ばれる、人以上の力を持つ人外。総じて人と同程度以上の知性と魔力を備える超越存在のひとつ。存在する次元として人族より神族に近い神秘を内包した存在である。人に畏れられ、同時に敬われるもの。辺境では彼らを聖なるものとして崇める者たちも少なくない。
――なんでこんな街中に、なんで人間（エスティ）と一緒に……？
知恵ある獣達は個体差こそあるが人前に出てくる事は稀だ。だというのに何故人と行動をともにしているのだろう。そんな話は童話か伝説、または数ある英雄くらいのものである。
「まさか、――、エスティって加護者……？」
加護者とは知恵ある獣からの加護を受ける聖人だ。加護の程度にもよるが国家をあげて錬成される騎士に並んで強力な力を個人で所有する、本当に英雄みたいな人族だ。
加護のなかで契約した獣そのものが行動をともにするのは最大級の親愛と加護を意味する。
しかし。
「――おい、ソォ。てめぇ、なに勝手に出てきてやがる」
「関係ありませんよ。こっちの認識操作なんて最初からそのお嬢さんには効いていませんから。――ああ、サナリエさん？別に畏まらなくていいです。私はあんな人の宗教概念に組み込まれるような存在ではありませんので。逆に我々は神や悪魔、それらの神秘に対してあまり近づくつもりはありません」
存外に『知恵ある獣』ごときと一緒にするな、という意図を含んだ

ような事を言う。
ソォと呼ばれた白蛇の言葉にエスティはとても怪訝そうな顔をする。
「認識操作が効いてない？……、それは本当か？」
そうです、と白蛇・ソォは頷き、その黄金色の瞳でサナリエを見つめる。
「どうやら――――サナリエさんには相当な潜在能力があるようですね。ここに入り込めたのもそのおかげのようです。当然、彼女には今のこの部屋の内装や主人の姿かたちもそのままに見えていることでしょう」
「うわ……」
小さく呻くエスティ。
まるで加護者がどうとか言う以上にサナリエこそが脅威だと言わんばかりの彼らの様子に逆にびっくりして困惑するサナリエ。もはや話についていけない領域である。
「……？」
「サナリエ。いま、俺の事がどう見える？姿とか髪や目の色、それに雰囲気」
「？えーと、あたしより少し年上の男の子？黒髪に黒瞳、雰囲気は……悪戯小僧？」
「ぐわっ、ホントにそのまんまだっ！嘘だろ、おい。――――ちなみに最後は余計だ」
本当なら優しげ男性Ａに見えるはずなのに、とかなんとか言う。どこか悔しそう。
「え？え？どーいうこと？」
「サナリエは大したヤツだって事だよ。――――あー、もぉいいや。済んだことは仕方ない。ほらほら、食事を続けよう食事を。――――細かい事はどうでもいいや」
だれた様子でエスティ。その様子には気安げなものが強い。
だから居住まいを正す必要もないかな、とサナリエは感じた。それに彼女自身、誰かしらに必要以上に丁寧に接するのは嫌いだった。

「えー、もっと細かい事を聞きたいなー？」
「ちょっと前に『余計な事は詮索しない』みたいなこと言ってなかったか？」
「むー」
頬を膨らませるサナリエ。そうしていると年相応の可愛げがある。
まあ、普段が普段だから生意気な印象はどうしても拭えないけれど。
「……じゃあ、ちょっと違う面白い話をしようか」
はぐらかすようにエスティはそんな事を口にする。もっと追求したかったが、それ以上にエスティの言う「ちょっと違う面白い話」とやらが気になった。
「へぇ、面白い話？」
「こう見えても色々な所を目にしてきたんでな。あーそうだ、こんな話がある――――」
エスティは笑いながら語り始めた。

◆

何人もの人間がぶっ倒れて呻いている。
倒れているのはサナリエを追うように命じられていたバライという男の手下だ。
そのバライの手下たちは誰もが気を失っているようだ。もしかしたら死人もいるかもしれない。……が、そんな事はどうでも良いことだとウェルジットは考えている。
――――どうにも、きな臭いな。
倒れているそいつらを睥睨するウェルジット。
ちなみに最初に手を出してきたのはバライの手下連中だ。どうやらウェルジットをサナリエと勘違いして襲ってきたらしい。まあ、男女の違いがあるとはいえ双子だ。間違われるのも無理はない。見た

目で大きな違いといったら髪型くらいだろうか。
双子の妹であるサナリエが騒動に巻き込まれていることはウェルジットも知っている。妹なら問題なく逃げられると思ったのだが導士崩れがいたので手負いになったらしい。しかし、まだ捕まっても殺されてもいないということは倒れている連中を締め上げて知った。
導士崩れがハロレイ（この街）に来ていた事は知っていたが、まさかバライの手下になっているとは知らなかった。この街だって広いから騎士崩れやら導士崩れはそれなりにいる。だが、まさかゴロツキ連中がそれを雇うとは。連中には分不相応な暴力である。
「少し前から妙な話が多い」
誰にとも無く呟く。
この国の英雄でもある暴君の王を妥当する為に転生者だか加護者だかが街に入ってきたという噂だってある。眉唾だが。
この世界では個人が絶大な力を持つ事がある。英雄やら加護者、それに転生者がそうだ。そんな超越存在同士の殺し合いになれば自然災害なんかよりもよっぽど性質が悪い。街が半壊する事だってあるだろう。
———単なる噂だ。
考えをそう切り捨てる。ウェルジットは妹（サナリエ）とは違ってどうでも良いことをわざわざ思索する趣味は無い。
さて、これから妹を探そうか、それもと騒ぎの元凶（バライ）を始末（どうにか）しようかと考える。
そこに。
「サナリエ。———探したぜ」
いかつい大男、バライだった。その後ろには陰鬱な雰囲気をまとった導士崩れがいた。それに四人ほどの手下がついている。
彼らを横目に見ながらウェルジットは無表情に溜息を吐く。
「バライ。僕はサナリエじゃない」
「なんだと……？」
———知らないのも無理はない。僕と彼は面識が無いのだから。

しかも双子だから背格好がほとんど変わらない。ウェルジットとサナリエのことを男女の性差以外で見分ける事は出来ないだろう。
「……どういうことだ」
確かに違う、と納得してくれたバライ。
この双子では持っている雰囲気が大きく違う。サナリエは女なのに好奇心旺盛でやたらに活発な動的な印象であり、ウェルジットは物静かでどこか冷徹な静的な印象なのだ。
とは言ってもまず初見では、ほとんどの者はただの見間違いか演技だと誤解する。そう考えるとバライという男はゴロツキの大将にしておくには勿体無い理解力だ。世が世ならもっとマシな生き方も出来ただろうに。
「噂くらいはあっただろう。『サナリエに双子の兄がいる』というのは」
「――ああ。聞いたことはあるぜ。ヤツに暗殺者の兄がいる、ってな。てっきりサナリエの偽装だと思っていたんだが。まさか事実だったとは」
「暗殺者？そうか。そこまで知っていたか」
――やはりこの男、侮れん。
噂だったら『サナリエに双子の兄がいる』『その兄は後ろ暗い仕事をしている』くらいのことは聞くかもしれないが、その「後ろ暗い仕事」の中身まで知っているとは。
ウェルジットは頭の中でバライに対する脅威度の度合いを引き上げた。
「質問したい。なぜサナリエを襲う？妹（アレ）は愉快犯だが性悪ではない。損害を受けて苦々しく思ってもわざわざ手を出す危険を負ってまで始末したがるとは思えない」
「こっちにも色々と事情があんだよ」
「つまり体面（たいめん）か。スラム街にも群れ同士の対立がある。その他の連中に『女に仕返しも出来ない』などと思われては困るという事か。くだらない」

「……俺たちみたいなのにはそんなくだらない事こそが、重要なんだよ。こんな時勢だ。小さな綻びや弱みでさえ見せるわけにはいかない。くだらないが、そんな考えが存在するんだ」
バライはいかつい顔つきに、思慮深く厳しい静かでいて強い表情を浮かべる。
ウェルジットはバライ配下のゴロツキ連中の結束力が他の似たような者達より強い事を思い出す。なるほど。確かにこの男になら人望は集まるだろう。スラム街は治安が悪く、どんな者達でも寄り集まらなければ生きていけない。一人や二人で生きていけるウェルジットやサナリエのような強い者のほうが少ないのだ。
ただ弱いだけの者が生きるにはここの環境は、厳しい。
一人では耐えられないから仲間を作り、自らの群れを守るために他の群れを威嚇する。そこでは道徳など二の次だ。妥協など出来ない、どんな汚い事でもやらなくてはならない。道徳や正義なんて語れるのは恵まれている者達だけだ。
「それで。サナリエにそうするように、僕にも敵対するか」
「それはお前さん次第だぜ。俺としてもはっきり言ってアンタみたなのは相手にしたくない。サナリエの嬢ちゃんは魔力こそ強いが魔導式の知識が無いからそんなに怖くねぇが。――見たところアンタは別のようだからよ」
バライは倒れている連中を見ながら言う。死人はいない。もしこの倒れている者達の中に死者がいたら彼の反応はもっと違っていただろう。
――敵対しないなら見逃す。相手にしない、か。
ウェルジットが強大な力を持っている事を認識しながらも『敵対するならば戦う』という強い意志をバライは持っている。どんな種類でも人を率いるのは何かしらの強さがいるのか。その強さが押し付けの暴力か、自らの能力かは、きっとあまり意味のある差異ではない。
――僕は強いヤツは嫌いじゃない。

加えて言うならば持って能力を生まれた強者である自分なんかよりも、弱者と生まれつきながら強者となった彼のような者には素直に尊敬さえ思う。それがどんな種類の強さであっても獲得するまでに努力か幸運か、何かがあったのだ。
しかし、ウェルジットとしてはサナリエに肩入れすることはもう十年以上も前から決めていることなのでその好意にもあまり意味が無いし敵対するなら容赦する気などさらさらないが。
ウェルジットの内心を、バライは正しく感じ取った。
「やっぱり相手するしかねぇか。仕方ない」
バライが目配らせすると四人の手下と導士崩れが身構える。頭領の護衛役だけあってその動きはただのゴロツキなんかよりも洗練されていた。
「――――提案がある」
静かにウェルジットは言う。
「……聞こう。言っておくが時間稼ぎだったら意味は無いぜ」
「提案はこうだ。サナリエは僕のほうからお前達に手出ししないように説得する。妹(あいつ)を説得するのは骨だろうが、できなくはない。それでどうだ」
「いまさら、そんな事を聞けるかよ」
「もちろん、ただそれだけなんて虫がいい話なんかじゃない。――――交換条件として仕事を無料(ただ)で請け負おう」
その言葉を聞くと、すぐにバライの表情に理解の色が浮かぶ。本当に察しのいい男だ。
人差し指を立てて言う。
「一人だ。お前が敵対する連中のうちの誰かたった一人だけを始末してやる。誰でもいい」
「誰でもいい、だと？」
「そうだ。他の連中の頭領格だって始末してやる。――――贅沢を言うならばとりわけ悪人がいい。僕だって小さな良心がある。どうせ殺(や)るなら悪人だ」

「――……一人というのは少なくはねぇか？一人殺したくれぇじゃ優位には立てん」
「その選択はお前が選べ。たった一人だけでも、誰を狙えばより効果的かお前ならば分かるはずだ。僕の見立てでは、お前にはそれだけの能がある」
バライは思案する。このごつい大男の頭にはスラム街の力関係のほとんどが納められているはずだった。
「分かった。交渉成立だ。――そっちから手出ししない限り、もうあの嬢ちゃんにはこっちからは何もしないように仲間には言い含めてやる」
「ただし、いまサナリエがどこにいるか分からない。もしサナリエが死んでいるような事があったら。交渉は無効だ。――一人の残らずお前らの仲間を始末してやる」
ウェルジットの殺気に周囲の温度が急に下がる。実際に魔力を孕んだ殺気だ。物理的にも温度が下がっている事だろう。
直接に威圧されたわけでもないのに四人の手下たちは全身を引きつらせて硬直し、魔力抵抗があるはずの導士崩れさえ身構える。バライはたいしたものだ、正面から殺気を受けて顔面蒼白になりながらもニヤリと笑う。
「ああ、いいぜ。その時は、戦争だ」
「僕は言ったぞ」
踵を返すウェルジット。それを他の六名は見送った。
……こうしてサナリエの騒動は一応の解決を見せた。

◆

その頃、騒動の解決を知らないサナリエはエスティやソォと談笑していた。

「それで？それで？そのでっかいのってどんなの？」
「ん。この辺の建物よりも大きい人形だよ。鉄の。中に人が乗れてね、運転するんだ」
「人形？要するに魔導士が使役したりする石像（ゴーレム）みたいなものでしょう？運転するって、馬車とかみたいに？」
「運転するって意味では同じかなー。それで、そいつが倉庫にいっぱいあってさ。記念に一つもらってきたんだよね。もちろん、無断でさ」
パクッてやったぜ、はっはっはっ！とエスティ大笑い。なんだか見てるサナリエも楽しくなってくるような笑い方だった。
「でもなんでそれにしたのよ？もっと強いのとか他にあったんでしょう？」
「人間と同じ形をしていたのが競技用のそれしかなかったんだ。普通、道具ってのは用途別に先鋭化した形をするものだから。人の形していないのが多いんだ。――――で、何で人の形をしたヤツにしたかというと、趣味以外の何者でもないな」
「主人、何度も転んばして二体ほど壊してから逃げましたよね。『俺のせいじゃなくてこいつが悪い』とか何とか言ってましたけど」
「あっはっはっ、なにそれぇ」
くすくすと笑うサナリエ。
エスティの話はおおよそ現実的ではなかったが空想にしては内容が細かかった。ところどころで名称を伏せているのが分かったが、エスティの語る物語はとても面白かった。
エスティが自分の体験談を語り、その過去をソォがここがこうだった、こうすべきだったとなじるのだ。その掛け合いもなかなか愉快だった。
サナリエにとってはエスティの話の真偽はともかくその物語は面白かった。楽しいのでその話が嘘かどうかなんて二の次である。
すっかり二人（と一匹？）で食後にお茶を用意してお菓子をつまみ

つつ話し込む。
特にエスティとサナリエは基本的に快楽主義者なので意気投合しつつある。
「これって面白い色合いのお茶よねー。薄い緑色って。あたしは茶色とかしか見たことないわ」
「そりゃあそうだろうな。こいつは俺が元いた場所から持ってきたものでね。まあ、それでも不味(まず)くは無いだろう？」
「あと甘いお菓子なんてあんまり口にできないしねー。お茶なんて嗜好品だし、砂糖なんかなんてこの辺りじゃ滅多に手に入らないもん。この手の贅沢品はここ十年近くご無沙汰だったわ」
「はっはっはっ。好きなだけじゃんじゃん食え。入手経路は秘密だぞ。――あと、そんなに食べると太るぞ？」
「女性に太るとか禁句よー。エスティ、紳士失格―」
「ふぅん？この辺りでも細身のほうが美人なのか？」
「そりゃだらしなく太っているよりはいいわよ」
「――へぇ。そこまで価値基準が似ているなら分かりやすくてよろしい」
「どういうこと？」
「人間の美的感覚なんて場所によって曖昧でね。逆に太っているほうがいいとか。場所によって価値基準なんてがらりと変わるから。それ以外にも、ある場所で合法な行為がある場所だと死刑になるほど重い罪だったりすることなんてそんなに珍しくない」
ふぃー、と疲れた感じに溜息を吐く。
「ふーん。経験者って感じねぇ。旅とかってもう長いの？」
「まだ半年ってところか。元いた場所ってのも面白くはあったんだけど、もっと面白いことがあったからそっちに乗ったってとこだ。より愉快なほうを選択したんだ」
どんな選択だったかは口にしないがエスティの表情に後悔の色は微塵も無い。
「でも故郷を離れるのって、寂しくない？」

「んー、そうでもないな。俺って昔から妙な放浪癖があったし、理由は忘れたけど電車を使って一人で茨城から広島まで行ったりしたしなー。小学生の時だぜ？たしかとっといたお年玉まで使ったんだよな。理由はなんだったっけ？やっぱり理由は無かったかなー。きっと俺っと故郷とかどうでもいいんだろうな」
「？へ？」
「主人。いきなり物思いに耽らないで下さい。知らない名称が出てきてサナリエさんが困惑しています。――それに過去の奇行なんて聞かされても困りますよ」
「おっと、悪い。気にしないでくれ。……で？サナリエも旅とかしてみたいのか？」
話の矛先を向けられてサナリエは少し返答に詰まる。
「あたしは、そうね。……あたしも、どっか遠くに行ってみたいかな。こう、ずぅーっと遠くの場所をにまにま笑いながら見てまわるのよ。うん、きっと面白いわ、それ」
「ああ、面白いぞ。――うーむ、同意見だったなぁ、俺も」
「同意見だった？過去形？」
「だって、いまの俺がそんな感じだからさ。やってみたい、じゃなくて実行中だから」
「なるほどねぇ」
ふむふむとサナリエは頷く。そう思うと何かエスティが羨ましい。きっと彼は何処までも遠くに行ってみようとしているのだろう。
――んー。私も、そういうことをしてみたい、かも。
もとより故郷なんて持たない身だ。こんなスラム街なんかでこれから一生を過ごすつもりは初めから持っていない。
緑のお茶をこくこく飲んでから「ほぅ」と息を吐く。
「そうねー。あたしもエスティについて行って色々見て回れたらきっと楽しいでしょうねぇ」
思いつきで口にする。ぼんやりとしている彼女を見つめてエスティは言う。

「――じゃあ、来るか？」
「へ？」
思わず間抜けな声を出してしまうサナリエ。エスティを凝視する。
エスティも笑いながらサナリエを見る。
冗談っぽくニタニタ笑っているが、少しだけ表情が真剣そう。
「きっとお前なら俺よりも旅を楽しめるんじゃないか？よかったら来てみろ」
「でも――」
言い淀むサナリエ。
――いきなりそんな事を言われても。
その戸惑っているサナリエに対し、どこか楽しそうにエスティは告げる。
「人は出会いと偶然でいくらでも変われるし変わってしまう。俺がその代表例さ。ようはきっかけだ。あの妙なオッサンが来なかったら俺だっていつまでも面白おかしくもとの場所に定住していただろう。――いいさ。答えはすぐでなくても。俺だって元々は定住者だったし、答えを出すのに時間がかかった。まあ、よかったらそういう選択肢があることを覚えておくといい」
くっくっ、と笑いながら言う。そんなエスティに対してソォが口を挟む。
「主人。彼女を誘うつもりですか？」
「ソォ。思い出せ。俺だって誰かに誘われたクチだぞ。だったら俺も誰かを誘ってみても悪くないはずだ。ちなみに何かルール的に問題ってあったか？」
「ありませんけどね。いいでしょう。好きにして下さい」
「――だとさ。まあ、しばらくはこの辺りにいるはずだからその間に答えを出すといい」
そう言うとエスティはテーブルのお菓子をぱくっと食べた。「うん、

甘い」とか言う。
「そうねぇ。あたしは――」
「――おや、来客ですね？」
言いかけたサナリエの言葉をソォが遮る。エスティの肩から、ふわっと柔らかく飛び上がる。
「どの辺りに？」
「この仮住まいのすぐ近くにきています。印象迷彩を施していますから、扉に気付けていないみたいですね。――おお、これは。サナリエさんにそっくりな男性です」
「ウェルだわ、そいつ」
「うん？だれ？」
「あたしの兄貴よ。たぶん、あたしを探しに来たんだと思うわ。兄貴って魔導も使えるからあたしの大まかな位置くらいはつかめるのよ」
「へぇー。……ソォ、印象迷彩を解除。入れてやれ」
「分かりました」

◆

「ありゃ？ウェルが問題を解決しちゃったの？」
「そうだ。僕としては不本意だったが、仕方ない」
双子の兄妹（きょうだい）の間で情報のやりとりをした。ウェルジットは妹に暗殺依頼を受けた件は伏せて事のあらましを説明。これで何でもなかったことになったと。
「――おー、似ているな」
ウェルジットとサナリエが並んでいるのを見てエスティは言う。エスティから見たら二人の違いは髪型くらいのものだ。サナリエは長い赤毛を後ろで一つに括っている。ウェルジットのほうは短く切り

そろえている。よくよく見れば男女の性差で体型が微妙に違うが、それだけだ。
似てる似てる、と楽しげに呟くエスティにウェルジットは視線を向ける。
――妙なヤツだ。
そうウェルジットは思う。どことなく普通でない雰囲気を持っているが、悪い人間ではないように見える。ウェルジットは自分の目を信じることにした。
「エスティと言ったか。サナを助けてくれたらしいな。感謝する」
「ん。気にしなくていいぞ。好きでやった事だ」
手をひらひらさせて気安げに言うエスティ。
「どうだい？ウェルジットもここでしばらく休んでいく？新しいお茶と菓子も出すけど」
「……いい話だが断っておく。長居するのも悪い。それに」
ウェルジットはまだ菓子を好きにかじっているサナリエの首根っこを掴む。いきなり首を掴まれたサナリエは「はふぅ」と呻く。
「サナが本当に世話になった。妹(これ)があんまりそちらの迷惑になってもあれだ」
「っつ。なにすんのよ！」
掴まれているサナリエが「がぁー」と暴れる。なんだか女の子がするにはいやにパワフルな動きだった。が、そこは兄、それを難なくいなしている。
しばらくするとサナリエは脱力して動きをぱったりと止めた。どことなく猫っぽい、と思って笑うエスティ。
「あううぅ～」
「サナリエ、泣くな泣くな。ほれ、菓子を包んでやるから」
どっからか包みを取り出してくるエスティ。いくつかの包みを「ほれ」と突き出す。
「わっ、ありがとっ」
「……」

喜ぶサナリエに渋い顔をするウェルジット。対照的な双子で面白いなぁ、とエスティ。
ちなみにソォは、また説明するのが面倒くさい、という理由でエスティの服の下に隠れて「何で私がこんな目にあっているのでしょうか？」などと後ろ向きに自問自答している。
「じゃ、ウェル。あたしは先に帰っているわよっ！――――エスティもまた会いましょう」
からからと笑いながら菓子の入った包みを大切そうに抱えて部屋から出て行くサナリエ。エスティは「じゃ、またー」と軽く手を振る。
ウェルジットは溜息を吐く。
「では僕も帰るとしよう。本当にサナのヤツが世話になった」
「だから気にしなくていい」
そう言うエスティにウェルジットは静かな目を向ける。
「しかし、サナが懐くのは珍しい。――――サナが懐くということはエスティ、君は変わり者なんだな。きっと」
「変わり者？」
んっふっふ、とエスティは笑う。よく笑う男だなとウェルジットは思う。いつもむっつり黙っている自分とは大違いだ。何か感心してしまう。
エスティの笑みに見送られてウェルジットはその場を後にした。

◆

「――――……変わり者っていったら、たしかに俺ぁ変わり者だ。なにせ世界の秩序からさえも微妙に逸脱しちゃっているからなー」
「主人。なにをいまさらな事を言っているんですか」
一人静かに言うエスティ。その服の下からソォがもごもごと答えた。

「ほらー。ウェルも食べる？」
「僕は甘いものは苦手だ」
双子は住処にいた。
スラム街の一角にある小さな、だが、たった二人の兄妹が住むには十分な大きさの家。
元々は廃墟になりかけていたのを二人が修繕して使っているのだ。
とは言っても二人ともあまり家に寄り付かないのでもっぱら就寝くらいにしか使っていない。
サナリエは長椅子に寝転がって、貰いものの菓子をパクついている。
ウェルジットはそれを横目で見ながら黙々と本を読んでいた。スラムではないまともな方の通りにある古本屋で購入した本だ。サナリエは本なんて見ると嫌そうな顔をするがウェルジットにとっては本に書かれている物語を読むのは娯楽としては面白かった。つかの狭い世界を思い出させてくれるから。
「サナ。———あのエスティってどういう奴なんだ？サナにしては随分と懐いていたが」
「へぇー。ふーん。……気になるんだ？」
「別に、お前の彼に対する印象を聞きたかっただけだ。そのニヤニヤ笑いを引っ込めろ」
スティック状のお菓子を行儀悪くくわえたまま、サナリエは「うーん」と考えて。
「そうねぇ。———面白い人だった、かな」
「面白い？」
「何でもかんでも眺めて『面白い』って思っているような感じかしらねー。傍観者ってわけでもない。見ているだけじゃなくて積極的に関わってこようとするような」
うんうん、と彼女は自分の考えに納得するように頷く。
「それにお菓子をくれたしね♪」
「むしろサナにとって重要なのはそこか」

ジト目で餌付けされてしまった妹を見るウェルジット。食い物に釣られるとは。サナリエはそんなウェルジットの視線に構わずにパクパクとお菓子を食べている。
「……たしかにおかしくはある。こんなスラムに隠れているくせに菓子やら茶なんかの贅沢品を人に振る舞うような金銭的な余裕があるなんて」
「ウェルー……。もしかしてエスティのこと嫌い？」
むー、と非難するような視線を向けてくる。
それに対して静かに首を横に振るウェルジット。
「いいや。妙だとは思うが悪い奴だとは思わない。気まぐれそうなのが少し怖いが。――それに、まがりなりにも身内の恩人でもあるからな」
「まがりなりにも、ってのが気になるわねー」
「気にするな。――、ん。時間か」
「？――ウェル？どうしたの？」
本をパタンと閉じて立ち上がったウェルジットを見てサナリエが尋ねた。ウェルジットは本を自前の本棚に戻しながら答える。
「ちょっと出かけてくる？」
「ふぅーん。……恋人でも出来たか兄貴。にひひひ」
にまにまと笑うサナリエ。
「ほぅ？僕にそんな相手がいるとサナは思うのか？」
「さぁ、いてもおかしくはないんじゃない？愛想無いけど顔は良いしねぇー」
双子の妹の言葉に兄は呆れる。
「サナ。同じ顔をした相手にそんな事を言ってもな。暗に自分の顔を褒めているのか」
「その通り。……まあ、実際に兄貴に恋人ができるような甲斐性とか色気があるとは思えないけどねー」
実はウェルジットには恋人くらいはいるのだけど。教えようとは思わない。

――僕は妹に遊ばれるのは嫌だからな。
「そっくりそのままお返しするよ。お前こそもっと可愛げを持つべきだ。言い寄る男を殴ってばかりじゃ恋なんか出来ないぞ」
これは結構、本気で言うウェルジット。正直な所、こいつを制御できる誰かが出てきて欲しいものだとウェルジットは思う。
「あら。だったら今日会ったエスティにでも声かけてみようかしら？」
「好きにしたらいい。――じゃあ、僕は出かけてくるよ」
例の交換条件について話をしてこなくてはならない。

家から出る。
外はすっかり暗い。スラム街には街灯なんてものは設置されていない。ただひたすらに暗い中でこそこそとスラムの住人がそれぞれの理由で闊歩しているのだ。
ただでさえ治安が悪いここは、夜になるとさらに物騒になる。ウェルジットやサナリエくらいに腕が立つものでなければ夜の出歩きは控えるべきだろう。
住処にしている家の周囲に建設した結界がきっちり作動しているか確認する。普通、いくらこの世界の住人が多少の魔導、魔法が使えるとしても結界なんて複雑な効果を持つものは造ることが出来ない。しかし、ウェルジットには魔導の知識があり、それなりの結界ならば作成、維持ができる。
双子の住処に作成した結界はそこそこの上等品だ。この結界があれば例え尾行してくるヤツがいたとしても自分たち双子のことを見失ってくれる。――そのはずだった。
「よ、ウェルジット」
「！……エスティ？」
驚きに、僅かにウェルジットの声が震えた。ウェルジットが驚くことはあまりない。

その様子にまるで頓着せずにエスティは楽しげに声をかける。
「いや、別に君らの家に訪問するつもりはないから。ただ、忘れ物を届けに来ただけ」
「忘れ物、だって？」
「ん。これだ」
スタスタとすぐ近くまで歩み寄ってきてウェルジットの手の中に何かを押し付けてくる。鞘に納まった短刀。鍔元には意匠を凝らした造り。――サナリエの得物だ。
本当に忘れ物を届けに来ただけのようだった。ウェルジットがひどく苦労して施した結界を軽々と突破して。
初めから只者（ただもの）ではないと思ってはいたが、――。
「……エスティ。お前は、いったい何者だ」
「さぁ。いったい俺はナニモノでしょう。――哲学の問答かい？」なら暇な時にしてくれよ、と笑うエスティの様子に、どこかウェルジットは寒気を感じた。
「質問に答えて欲しい」
「ウェルジット」
静かにエスティは言う。
どことなく苦笑するような表情。
「聞かれて困るのはお互い様。――君らだって普通の双子じゃないだろ？」
「！――なぜそれを……？」
なぜ、この少年が自分たち――知っているのはウェルジットだけだが――の秘密を知っているんだ？誰にも言った事はないはずだと言うのに。
内心で激しく動揺するウェルジットに、エスティはどう言ったらいいのか、と思案顔になる。
「遺伝子的に、まず男女の一卵性双生児なんてありえない。――とか言ってもわからんだろうなぁ。この世界が幻想寄りだとしても遺伝子の決まりがなくなるほど属性域が離れているはずはないから

この推測は間違ってないと思うんだけど。――――ああ、安心してくれよ。君らが普通じゃないって事はわかっているからとそれについて詮索する気なんかないから」
すっ、と踵を返すエスティ。
「あ、待て……！」
「じゃあ、また近いうちに――――」
くっくっ、と笑いながらエスティはそのまま闇に輪郭が溶け込んでいって、いなくなった。

2

◆

首都ハロレイ。
多くの人達が住む中流市民が住む住宅街とあぶれ者が住むスラム街が半分ほどを占め、ごく少数のはずの特権階級がもう半分を占領している街である。
貧富の差が歴然と存在する、まあよく人間の作る社会である。
「人間ってのはどこ言っても似たような事しかしないのなー」
「主人が『人間』がいない場所に行かないのが悪いんじゃないですか」
「あんまり違いすぎても面白くないだろ」
などと会話しているのはエスティとソォだった。
場所はスラム街から少しばかり離れた中流市民の生活区域でもある通りだった。スラム街なんかに比べればよっぽどまっとうな雰囲気の町並みである。
その通りに面する屋外で食事ができる飲食店（カフェテリア）。そこにあるいくつかのテーブルのひとつにエスティは座ってぼんやりと通りを行く人々を眺めている。ソォは彼のすぐ横をフワフワと羽も使わずに浮遊している。
「で、ソォ。どうだった？」
ぼそりと言う。
その気になればエスティとソォは空気振動による音声会話以外の方法でも意思の伝達はできる。が、エスティとしてはそんなことをわざわざする気分にはならない。
「無理ですね。やるならもっと取っ掛かりが必要です。実際に使用された道具や凶器でもあったら辿りやすいんですけどね」

「――はははぁ。ってことはやっぱり協力して貰うしかないか」
「そうなりますね」
彼らの姿は決して人目に引かないものではない。はっきり言って目立つ。
エスティはまだ単に珍しい特徴を持った人種というだけだが、ソォはアウトだ。すでに目立つとか目立たないとの基準に当てはまらない。そもそも喋る獣なんてこの世界にだってそんなにいないのだ。しかもその上に人通りは少なくない。
……しかし誰も、まるで彼らを気にしない。
まるっきり周囲に溶け込んでいる、という感じ。
――そりゃそうだ。ソォが印象迷彩をかけているからな。
印象迷彩。イメージスクランブル。
人や高等生物の『ある対象への認識』に干渉して操作する力だ。ようするにこれを使えばどんな人でも極端に影が薄くなるのだ。
例えば、明らかに異邦人である少年の外見とか羽の生えた喋る白蛇なんかがまったく気にならなかったりする、そういう結果を作り上げる事が出来る。
その程度で大して強い力でもない。出力を引き上げれば初対面の相手に無理やり好意を持たせたり一目惚れ状態にさせたりもできる程度の能力だ。――断っておくとエスティもソォもそんな使い方をしたことは今のところ、一度もない。せいぜい目立たないようにするくらいである。
「主人。ここにはどれくらいの期間、滞在するつもりなのですか？」
「んー。一週間くらいか。もっと西のほうも見に行きたいし」
「それはただ移動するだけでしょう」
「ソォさー。まだここに渡って一月も経ってないんだぞ？最低でも三月はいるさ」
「……好きにしてください」
「言われるまでもない」
諦めたようにぼやくソォに、エスティはニッと笑って言う。

それからエスティはテーブルの料理を思い出して口にする。不味い不味い、と食事をパクパク食べる。どうもこの料理は舌に合わない。
———やっぱり味覚の価値基準も場所によって違うなぁ。
内心で苦笑する。まあ、それも一興ではある。
自分以外の全てのものは自分とは違っている。その違いをわざわざ指摘したり拒絶するよりも『それも面白い』と納得したほうが楽しめるというものだ。
……エスティにとって、この世界は豊潤だった。
なぜならこの世界には魔導なんて魔法じみた技術がある。死後には魂さえも発生し冥府とでもいうべき『在処(ありか)』さえあるし、全知全能というわけではないけれど神様もいる。
もともと彼がいた世界に、魔法はない。魂はない。神はいない。それらに付随する現象もない。
ただただ圧倒的なまでに現実があっただけだった。それをつまらないとは思わなかったけれど、それでも今の状況に比べれば退屈だと判断しても間違いはあるまい。
そんな事を考えながらエスティが、もはやさして必要でもない栄養を補給していると。
「やほー。エスティじゃない」
「うーす。サナリエか」
軽い足取りでこちらへやって来たのはサナリエだった。どうやらこの辺りも彼女の行動範囲に含まれているらしい。ああ、それよりも。
———やっぱ、視えているんだなー。
印象迷彩が効いていない。
この世界の住人は魔力なる力を手足の延長のように扱える。その魔力は魔導書式などの手順を踏まえなければ通常は方向性(かたち)のない生命力として肉体能力を無意識で補助し、強化する。
つまりは魔導の知識がなくても魔力さえたくさんあれば、無意識で力が強くなったり目がよくなったり、……隠されているものが見えるようになる、と言う事だ。

――ソォは『サナリエさんには相当な潜在能力があるようですね』とか何とか言っていた。きっとそれが原因だろうな、俺たちがきちんと見えるのは。
あまり都合のいいことではないけれど、それもまた愉快。
「エスティってこういうところによく来るの？」
「あんまりこないなー。今日はなんとなくの気まぐれ。そっちは？」
「なんとなーく、ぶらぶらと。――エスティと同じで無目的よ」
お互いヒマねぇ、などと嘯いてみせるサナリエ。
そんなサナリエを視界の端に捉えながら、エスティは面白そうに辺りを眺める。
「なあ。この辺りってスラム街に比べると治安がいいのか？」
「ん～。トントンってところかしらね。あんまり変わんない。でも、さすがにスラムに比べると断然に小奇麗よ。このあたりは」
「治安がたいして変わらない、ね。この国って王政だよな」
「そそ。元虐殺の英雄っていう曰くつきの暴君様よ。――知らずに来たの、エスティ？」
「それなりに知ってはいるんだけどな。――治安が悪いのって王様のせいか」
「そーねえ」
聞かれて、オウサマオウサマ、と呪文みたいに口の中で呟いて思い出そうとするサナリエ。
「うぅーん。どっちかと言うとその下の貴族のせいね。その王様ってなにに使うのか知らないけどお金を貴族から巻き上げてんのよ。まあ、平民から搾り取るよりはずっと手に入るからでしょうけど。――で、そのとられた分をどうにかしようとして貴族がその代わりに市民からお金をこってり絞ろうとするのよね」
つまり市民↓貴族↓王、という金の流れである。ちなみに強制。
「あー、王サマが原因だけど。直接やっているわけじゃない、と？――ふーん？その王サマって何に使っているんだろうね、そのお金」

「あたしが知っているわけないじゃない。噂じゃ、道楽に使い潰しているだとか他国を攻めるための軍資金だとか言われているけど。誰も知らないわ」
ふーん。なるほど。
「で、それでいいのか市民連中は。よく分かりもしない用途の為に汗水たらして手に入れた稼ぎを奪われて。俺の知っている歴史じゃそんなときは革命するなり何なりするだろ？」
「これが無理なのよねー」
あはは、とどーでもよさそうに笑うサナリエ。国なんて知りませんって言う口調。ついでに無理な事はまったくやる気は割りませんと言う調子でもあった。
「だって強いんだもん。その王さま」
「へぇぇ？どれくらい？」
エスティがそう尋ねるとサナリエは遠くを指差す。その指先を辿るとずぅっ遠くに大きな建造物が見える。王城だった。
「なんでも城（あそこ）の警備なんかもほっとんどいないらしいわよ。侵入者なんかが無断で入ると王様の手で直々に殺されるんだって。生きて帰ってこれたのもあんまりいない」
「あんまり、と言う所が微妙に本当っぽいな」
「それにね――――」
……サナリエは知っている限りの王の話をした。

この国は五つほどの小国が一つに結合して作られた国だ。
一つにまとまる前は紛争が絶えない紛争地帯だった。今以上にひどい有様だったらしい。五つの小国は互いに同盟したり騙し合いをしたり、戦闘を吹っかけたり、末端の兵士の復讐で意味もなく無関係な村が焼かれて犠牲者を出したりするような状態。まさしく阿鼻叫喚。
そんな死があふれる、どこへ行っても戦場ばかりという時代。そん

な時代にアルコスという少年は現れた。当時は一人の兵士だったと言う。
なんの魔導知識も持たずただ小金の為に兵士になるしかなかった、貧しい少年兵アルコス。あからさまに数合わせの消耗品としての兵士だった。
戦場で真戦力である『騎士』の為のただの捨て駒として使い潰されるはずだった彼は、彼を消耗品としようとした雇い主たちにとって意外な活躍を見せた。
囮として参戦した、帰れるはずもない戦場から、彼は独り帰還したのだ。
――――戦場の敵兵を一人残らず皆殺しにして。
上層部は狂喜したと言う。何せただ同然で拾った兵士がそこらの騎士を凌ぐ能力を持っていたのだ。……使える駒（もの）はいくらでも使う。アルコスは殺した。どんな戦場へ送られても敵兵のほとんどを倒してしまうのだ。彼がいる戦場で行われたのは戦闘ではなく虐殺だったと言う。
ある時は立った一小隊を率いてで拠点を防衛し、ある時は少人数で砦を奪還し、ある時はたった独りで戦場にいた軍隊を殲滅した。
ここまで来ると、彼は英雄と呼ばれるようになった。敵を皆殺しにする虐殺の英雄だ、と。
敵となった者たちは彼のことを『怪物』と恐怖し、味方たちは彼を『英雄』と畏れた。

「なんでも七十人近い騎士団だってたった独りで打ち破ったと言う話よ」
「騎士、ねー。騎士って、あの甲冑を着た、アレ？」
ソォが小さな声でエスティに耳打ちする。
「……主人、ここで言う騎士とは、ここの主要技術……『魔導』で強化された人間のことです。国の威信をかけて錬成（製造）され

る彼らは、言うなれば国の生きた最終兵器です。平均して戦果は一般兵とでは一体千。つまり、より多くの優秀な騎士を擁していればどんな小国でも大国に勝てるという理屈です」
「それを七十人か。話半分でも三十人以上。――――デタラメだな」

虐殺ばかりしていた彼はある時から転換を見せる。
当時、アルコスに命令を与えていた上層部たちは彼の力を恐れて彼の「使用」を極端に抑えていたはずなのに、命令されてもいないはずなのに彼は戦いを始めたのだ。
たった独りで。
しかし、紛争をしていた五つの全ての小国は長い戦争で疲弊していた。それがどれくらい疲弊していたかと言うと、唐突に思い立ったアルコスがたった一人で国を落としてしまえるほどに。いずれの国もひどく疲れきっていて、そしてアルコスは強すぎた。
彼は三日で五つ国のうちの四つを占領し、降伏させた。何故か、その戦闘では死者はただの一人もいなかったと言う。その頃にはアルコスの強さは伝説的に広まっていて誰も刃向かおうとはしなかったおかげだろう。
そしてその次には自国まで占領し、降伏させたのだ。
こうして、たった独りの手によって五つあった国は一つになった。
虐殺の英雄は、最終的に無血でもって王となった。

「最初は皆も喜んだって話だけどね。戦争しなくてすむようになったんだから、当然だとは思うけど。だって、もともとその紛争ってそれぞれの国の運営を握ってた一部の人間だけの思惑と偏見が原因だっただけで、どの国民も殺し合いなんてしたくなかったんだから」
「利権と偏見による紛争ですか。――――典型的な民族紛争ですね」
ふむ、とソォは頷く。

「王の政治は善政だったけど、それは最初の一年くらいだけだった。それからここ十年くらいは政治にも無関心で、さっき言ったように貴族連中から金を巻き上げるだけで何もしない。君臨するが統治せず、と言う感じかしらね。――だから王が無関心なのをいいことに貴族たちが好き勝手にし始めた」
自分の領地で好きに条約を作っては合法的に横暴したり、倫理に叛くような行為を嬉々としてやる貴族もいる始末。
「横暴と言うよりは、理不尽に民を虐げていんのよ。――娯楽として」
「いい趣味だな。その連中」
「全くですね」
はは、とエスティとソォが皮肉そうに言う。どこか仕草が似通っていた。
サナリエも同意見だ。下らない連中なんてどこにでも現れるものだ。

エスティとサナリエは市民街からスラムへと歩いていく。
エスティの仮住まいへ行こう、という話の流れになったのである。
サナリエのお菓子目当てがバレバレだったが、エスティは何も言わない。
――まあ、いいけどな。
半年くらい前からエスティにとって様々なものが変わっている。今ではいろんな上限なんかも壊れて久しい。食料だって飢餓の国を三日は救える程度は保有している。
「ねー。そういえばソォってなんでエスティの事を『主人』なんて呼んでいるの？」
「あー……。強いて言うなら皮肉の類だ。なぁ？」
「さぁ？知りませんね」
つい、とそっぽを向くソォ。
可愛いヤツだ、と思ってくっくっと笑ってしまうエスティ。

ソォは『主人』などとエスティを呼ぶが、立場は対等。……と言うか、むしろソォのほうが上なくらいだ。なのにソォは自らエスティのことを『主人』と呼ぶ。
正確にはソォのことについては皮肉と言うよりは意地に近いかもしれない。下手に存在意義なんて手にして生まれたのが原因だろう。
答えが出ないと悟ったサナリエは、さらに話題を変える。
「あ、そーだ。ねぇ、エスティ――――」
と、サナリエが何かを言いかけたその時だった。

どこかから悲鳴が響いた。

悲鳴。破壊音。
「ん、何かしら？」
「なぁんか事件が起きているみたいだぜ、――――行ってみるか」
くっくっ、と笑みの表情になってエスティは駆け出した。「好きにして下さい」と諦めたようにソォが呟き、それに付き従う。
「あ、ちょっと！」
「嫌ならサナリエは来なくてもいいぞ。先に俺の仮住まいにでも行っていてくれ」
遠くから言いながら速度を緩めもしないし、その動きに迷いもない。
「あーっ、もうっ！一人で行ったって気まずいじゃない！行くわよ、あたしもっ！」
サナリエもエスティを追って走り出した。

現場には人が多く。そして少しばかり血が流れていた。
いるのはスラム街に住む浮浪者たち。そして彼らに取り囲まれている三人の男たちだった。
取り囲まれている三人の男は全員、物々しい甲冑を着込んで剣などで武装している。

「もう一度言うぞ、聞け」
三人の男たちの中の一人が言う。喋っているのは他の二人よりも身軽そうな武装の男だった。しかし物腰や態度から彼が三人のリーダー格だという事が分かる。
「この周辺に違法に住み込む浮浪者に言う———退去しろ。……あー、これはここらを治める貴族の命だ。逆らうなら実力行使に出るように言われている」
大きくよく通る声で言う。
高圧的な台詞のくせにどこか気だるそうにな、うんざりしたような口調だった。
「何を言ってやがる！その貴族のせいで俺たちはこんな———」
その場にいた浮浪者の一人が怒鳴る。その言葉にまわりにいた人々もそれに同調する。
彼らの言い分ももっともだった。彼らだって好きでこんなスラムに住んでいるわけではないのだ。しかし、彼らの怒りの抗議を男は白けた様子で眺め。
「だから？俺はあんたらがどう苦しんだとかなんで虐げられたのかなんて事情は知らないし興味もない。———俺は仕事をするだけだ」
彼らの怒りの一切を意にも介さずにひたすら白けように言う甲冑の男。
「てめぇ……！」
そんな物言いに激昂した浮浪者の男が甲冑に殴りかかる———。
その前に彼の両腕が消失した。
「———、……え？」
呆然と肩から先がなくなった自分の身体を交互に見る。腕のあった場所から心臓の鼓動に合わせて噴水のように血が———。
「戯け。逆らうならば実力行使、と俺は言ったぞ？」
ぼとり、と足元に消えたと思われた両腕が落ちた。———甲冑の男に切り落とされたのだ。
「あああぁぁぁぁぁ！」

「……うるさい」
悲鳴と一緒に浮浪者の男の頭部が消えた。
ごと、とスッパリ切断された頭が地面を転がる。そして頭と両腕をなくした身体が崩れ落ちるのを、やはりつまらなそうに見届けた甲冑の男は言う。
「これから今日のうちにお前らの半分程度を始末する」
その言葉と一人殺された事でまわりにいた野次馬連中が、爆音のような悲鳴をあげて逃げ出した。甲冑の男はそれを相変わらずつまらなそうに眺めるだけで追いかけもしない。
今度は仲間の二人へ向かって。
「どうした、お前ら。さっさと仕事をこなせ」
「ニィグス。……だが、相手は」
「だからなんだ。半端者」
ニィグスと呼ばれたリーダー格の男は戸惑うそいつに続けて言う。
「お前らだって、こういう仕事だって分かっていて請け負ったはずだろう？だったら、いまさらなにを言うつもりなんだ」
相手の半端さを笑うでもなく、ニィグスは淡々と告げた。

甲冑の男たちが会話をしているのを物陰からエスティとサナリエ。
それにソォが見ていた。
「なんだ、あれ」
「……『掃除』よ」
苦々しい顔でサナリエが答えた。
エスティもそれだけで大体の事が分かったのでひとつ頷く。
「――、なるほど」
掃除。
スラム街にたむろする浮浪者の掃除だ。なにぶん、ここらじゃ人の命が軽い。それに、エスティは元いた場所の時でさえ似たような話を聞いたことはあった。街の浄化作業。

「……で、どうするんだ？」
「そりゃあ、逃げるわよ。いつも通りに。この手の騒動はほとぼりが冷めるまで逃げたほうがいいの。スラムの連中だってここに長いなら似たようにする。殺されるほうが間抜けなだけよ」
あーあ、とさばけた様子で彼女はそう言った。
エスティもそれに「ふーん」と相槌を打つ。ここは経験者に任せたほうがよさそうだ。
「さーて、見つかる前に逃げましょう」
「無理っぽいけどな」
うん、とひどく軽い調子でエスティが言う。これから起きるであろう出来事を予感してか、その声はどこか愉快そうだった。
「――へ？」

エスティの言葉は正しかった。
あのリーダー格の男、ニィグスがエスティとサナリエに気付いたのだ。
「ほぅ。こいつは」
感性が鋭い彼は二人の存在に気付いた。ただし彼の感性だけではソォにまでは気付かない。
「？どうしたんだ」
ニィグスよりも感性の鈍い二人の甲冑を着た男は疑問顔になる。鈍感な奴らだ、とニィグスは彼らの能力を頭の中にある表に書き付けておく。
「いや、少しばかり愉快そうな連中を見つけた。――そいつらはこの俺の獲物だ。お前らは適当にどこかに行くといい」
言われた二人はムッとするが、逆らえずにその場から仕事を果たす為に消えた。この仕事のみでの仲間だが、実力として彼らはニィグスに逆らえない事を分かっている。

「――へ？」
サナリエが「どういう意味？」と言いたそうな顔を向けると、エスティは愉快そうに指差す。
「ほら、そこ」
「――ほぅ、気付いたか」
すっ、と一人の男が指差した方向から現れた。――ニィグスだった。
「てっきり俺はそっちのお嬢さんのほうが強いと思っていたのだが。――お前、何者だ？あの二人だって今のは気付けないはずだぞ」
さっきまでの淡白な様子はどこへ消えたのか、ひどく禍々しく笑うニィグス。サナリエでさえ一瞬身を竦ませるような殺気を放つ彼の様子に、だがエスティは変わらずにひどく軽い調子。
「さぁて？俺はナニモノでしょう？――この前も言ったな、この台詞」
くっくっと笑うエスティ。こんな状況でも面白がる事をやめない。まるでどんな危機が現れようと傍観者である自分は傷つかないと言わんばかりだ。
「答える気はない、か。――見たところ身なりもいいし、浮浪者ってわけじゃないな。そこのお嬢さんはどうだか知らないがな」
「え、なにそれ。それってエスティは見逃すけどあたしは駄目ってことかしら？」
サナリエも負けじといつもの口調で言うが、やはりどこか焦った様子は隠せない。
「それはそうだろ、お嬢さん。君は明らかに俺の仕事の対象だ。――しかも、強いだろう？」
「むぅー。やるしかないのかしら」
じっとり冷や汗をかきながらサナリエは唸る。正直なところ、勝ち目は薄い。
「――サナリエ。止めておけ、そいつは『騎士』だぞ」

「んなこたぁ見れば分かるわよ。でもやらなきゃ殺されちゃうでしょ。それにエスティこそ見逃して貰えるんだから逃げたらどう？」
サナリエとしてもエスティがここで知らないフリをして逃げても文句はない。自分の命を他人の為に捨てようなんて思う奴はかなり少ないのは経験から知っている。
「へぇ？――――君、サナリエを殺すのか」
「お嬢さんの力量によるがな」
その答えにエスティは困ったような表情で腕を組む。
「そうか。それは困った。彼女には見込みがあるのだけど。仕方ない。――――俺が代わりにあんたとやりあうか」
「ほう？お前は見逃すって言っているんだぞ？」
「その割には嬉しそうだな。戦う気満々って感じだ。いやいや、面白い」
いきなりギラギラとし始めたニィグスを前にしてエスティはくっくっと笑う。
「なぁ、お前。――――あの二人も騎士だろう一つ聞きたいのだが。なぜ騎士ともあろうものが明らかに低俗な貴族などに手を貸す？」
「そんなのは金の為に決まっているだろう。――――騎士（俺たち）は身体を改造され強化されている。だがその身体を維持するためにはどうしても切実に金が必要になる。本当なら国が雇ってくれるんだが、この国はこの有様だろう？あの王様一人でこの街の他国に対する防護はほとんど必要がない。必然的に兵士や騎士は職がなくなるのさ」
「世知辛い世の中だ」
くっくっと笑うエスティ。元騎士のニィグスもにやりと笑う。
「まあ、そんなことはどうでもいいだろう？俺の仕事を果たさせてくれ。――――俺だって騎士の端くれだ。どうせ殺り合うなら強いヤツとやる方がいい」
「ああ、それがこっちに来た理由か。ふむ。――――サナリエ。そういうわけだからどこか行っていてくれ」

「え、は？なんでっ？」
「今のお前じゃこいつに勝てないから。なに、――――あと少し時間が経てばこの騒動は解決する。だから行け」
自信たっぷりに言うエスティに、仕方なくサナリエは頷いた。
「――――……ん～、すっごい不本意だけど。分かったわよ、もう。じゃあ、エスティの住処に先に行っているからね」
「ああ。あそこならまず騒動から離れていられる。そこで待ち合わせだ」
「早く来ないと、お菓子とか勝手に食べちゃうからねっ！死んだりしたら駄目だからっ！」
叱咤するようにそう言って、サナリエは走り去る。
その背をエスティはくっくっと笑いながら見送る。
「いいのか？別に俺は一対二でも構わなかったぞ」
「不敵だねぇ。くっくっ。まあ、ある意味で一対二だから安心しろ。――――ソォまずは任せた」
「ソォ？」
誰かいるのか、とニィグスは周囲を見回した。誰もいない。――――……彼にはソォの印象迷彩を見破るだけの能力はなかった。
「いいか、広い場所へ誘導してくれ。――――開始だ」
エスティが独り言のように言う。
すると、すぐにエスティの表情が変わる。何でもかんでも笑うような楽しげだった表情が、ただひたすら静謐な無表情へ。楽から無に。
「……！？」
ニィグスは相手の雰囲気が変わったことに驚いた。彼には鋭い感性がある。エスティが演技でもなく変質したのだと気付かせた。……気合を入れるとかそういう次元ではない。エスティはもはや別人だった。
「さあ、やりましょうか」
エスティは静かに言う。表情はとても穏やかな無表情だった。
それは雰囲気も口調もソォと呼ばれていた特異な姿をした白蛇とよ

く似ていた。もしこれをサナリエが見ていれば『ソォがエスティの身体を乗っ取った』と思うだろう。だが、ソォの事を知らないニィグスには分からない。
エスティがゆっくりと、ニィグスへ向かって右手をかかげる。
「！」
風景が歪む。――――爆音。

「おおおおぉぉぉっ？！」
ニィグスは本能的な危機を感じて全速力で、そのいきなりの出来事から逃れようとする。何がなんだか、唐突に過ぎて分からなかった。とにかく危険だ、と言う直感に従って動いたにすぎない。
「――――、っぐ！？」
回避しきった、そのはずなのに何か巨大な力で吹っ飛ばされた。石造りの壁に身体から激突する。極限まで強化されている肉体に致命傷ではないが、何をされたのか分からない。
「おや？よく避けましたね。直径五メートルはありましたが」
「今のは、……魔導か？」
「いえいえ、ただの空間圧搾。しかも外れでした。貴方をふっ飛ばしたのは伸縮のついでにオマケとして発生したエネルギーの余波です。しかしあんな一瞬で回避するとは。――――直撃すれば物理強度に関係なく一発なんですけどね？」
初めから当たるなんて思ってはいませんが、とエスティは誰かの口調で静かに言う。
「さて、主人から言い渡された仕事をこなしましょう。――――さあ、ついてきなさい」
いきなりどこかへ跳躍するエスティ。一度の跳躍で家屋に飛び上がり、二度目の跳躍でさらにどこかへと跳んでいく。
「――――ま、待てっ！」
逃がすわけにはいかない。どこかへと跳躍したエスティを追ってニ

ィグスも跳ぶ。彼の身体能力ならば追いかけるのは難しくないはずだった。

「――この辺りまで出れば十分でしょうか」
ふむ、とエスティは独り言う。
そこは街の塀から少しばかり離れた平地だった。そこからは街が遠くのほうに見えるだけで他にはなにもない。――大暴れするには十分な広さだった。
移動は迅速で異常だった、なにせここまで地を蹴った回数は二桁にもならない。
「ああ、十分だ」
くっくっと笑うエスティ。いつの間にかいつも通りの雰囲気に戻っていた。空間から染み出すように現れたソォが傍らにいる。
「しかし、主人。あの騎士崩れ、強いですよ。特殊能力での不意打ちでの殺害ならともかく、真っ向から戦ったら面倒です」
「いいのいいの。今のところ殺す気はないし。面白おかしく時間が潰せれば今回はそれで良し」
頭の中の予定表を確認してエスティは満足そうに言う。
「それで、ソォ。――アレを使うからさっさと転送してくれ」
「アレ？」
「ほら、この前。どこぞの倉庫からパクッて来たやつ。収納空間から転送してくれ」
「――――……あれ、ですか。本当に？戦闘目的ならもっと他に、」
「いいから。それに早くしないとあの元騎士が追いついてくる。早く早く。あ、それとあっちの方はソォが片付けておいてくれ」
「……わかりました。どっちもやりますよ」
エスティは楽しげで、ソォはどこか諦めたようだった。

「――――？な、なんだぁ？」
ニィグスは思わず呻いた。
そこには彼が今まで見たこともないものが鎮座していた。エスティを追いかけてきたらいつの間にかそれが代わりにいたのだった。
そいつは金属でできていた。まるでニィグスが着ているような鎧やら甲冑やらを完全装備にまで着込んだ感じ。しかしその癖にどこか有機的でスマート。その形は、――――ありていに言えば人間だった。大きな人形。
エスティの故郷の、その筋の人が見たら。「これは……！」と大喜びしそうな代物だった。
……平野に仁王立ちしていたのは間違いなく巨大な人型ロボットとかいうアレだった。
ソォは使うのを全力で嫌がった。そしてエスティは笑っていた。
一方、こんなの想像もした事もなかったニィグスはひたすら狼狽した。
もはや遊びの領域だった。
事実、この状況はエスティと言う存在にとっての娯楽場だった。
『あーはっはっはっ。もう大爆笑！』
声がした。外部スピーカーからだったが、ニィグスは知らない、分からない。でもエスティがそのデカブツを操っているのだとは認識する。
『前から一回使ってみたかったんだよねー！くっくっ！』
「！魔導石像（ゴーレム）の類か……！」
ニィグスが一昔前に魔法が飛び交う戦場を駆け抜けていた時期、家屋ほどの大きさの石像とやりあったことがある。術者が二人か三人で操っていたもので、どこかに隠れている術者を殺れば機能停止した。石像の動きそのものは鈍重で、始末するのはそれほど大変でもない。
「どこにいる……！」

『いやいや、中だって中。ふくくく。俺、乗っているから。これに』
腕組みで仁王立ちしていた石像（金属製みたいだが）がぶんぶんと自らを指差す。
「なにぃ？」
これまでにニィグスが相手にしてきた魔導石像の種類は様々だった。泥のようで斬りつけてもダメージにならないヤツから、一山くらいの馬鹿馬鹿しい大きさのものまであった。だが、その中に乗り込んでいるなんてのは初めてだった。
彼の驚きをよそに、エスティは待ったりなんてしない。
『それー、――――射撃』
頭部側面の穴が火を吹く。いわゆる火器の類。分かりやすく言うなら六十ミリのバルカン砲に酷似している。正式名称はエスティもよく知らない。
ダガガガガガガガガガガガッ！と元気良く弾丸が吐き出される。
平原に大音声が響き渡る。土が抉れて煙がもうもうと立つ。
『――――うわー、冗談みてぇ』
……ニィグスは健在だった。
「はぁ、はぁはぁ、はぁ――――――」
肩で息をして、剣を片手に握っていた。
剣で弾いたのだ。
機械制御での精密射撃、おおよそ五百発超過の弾丸の雨を。
「くぅ、はぁ。は、はははは っ！何かを連続で飛ばしてきているんだな！ふぅ、……ふぅ。その手の狙撃は騎士には効かないっ……！」
まあそりゃあそうだろう、とエスティはいい感じのコックピットの中で思う。
データベースであるソォに聞いた彼らの能力を考えると、このデカイ機械とでは一対一でギリギリ負けるくらいだと言う。まぁ、操縦席は生命保護の為に他より装甲が分厚いらしいから相手がどう頑張っても殺されはしない、とか。
『いやいや、面白い』

腕組した巨人のスピーカー越しにくぐもった『くっくっ』と低い笑い声。
この機体、なんでも伸縮する形状記憶合金の人工筋肉で作られているとかで人間の動きのほとんどを再現できるとか。
――まあ、もともとは競技用の機体だったんだから大した能力はないのだけど。本当に戦争で使うと言うなら人型なんて遊び以外の何者でもない。こういう形をしているのは娯楽だ。
しかしアレだけのこう威力弾丸を剣で防ぐなんてデタラメさ。さすがは幻想世界（ファンタジー）、構造的にこの手の世界は上限設定が曖昧だ。
――いや、素晴らしいね？
『んじゃ、次――再射撃』
また炸裂音の嵐。ニィグスは受ける事はせずに回り込むように走って避ける。縦横に走り抜ける彼の速度は実に秒速百メートル以上の超人の名に恥じない高速移動。
当然のように弾丸は当たらない。彼の走り抜けた少し後を弾丸が飛んでいく。
『んー、追加ぁ！』
ガシュン、と金属製巨人は右腕をかざす。
人間の手の平に酷似した形には、本来の人体ではありえない穴が開いている。巨大な銃口。
その銃口が火を吹く、高速グレネード発射。
着弾破裂。
「……！」
着弾地点から直径十メートルを吹き飛ばす爆発が連続する。もちろんその間にも頭部からも弾丸をばら撒き続けている。それらは地面に着弾しては粉塵を巻き上げる。
弾丸の雨に爆音爆風。
身に着けている鎧の類に炸裂弾の破片がいくつも当たり、身体の至る所に裂傷を負う。
その破壊の嵐の中をニィグスは必死に走り抜けて、――跳躍。

狙いは炸裂弾を連射し続ける巨人の右腕。
「おおぉぉっ……！」
叫びながら剣を振り抜く。全身全霊を込めた渾身の一撃。
キィィィィン。
金属同士がぶつかり合う澄んだ音が盛大に響く。
「ぐっ」
強すぎる手ごたえに腕がしびれ、身体の筋がいくつか断裂する。魔導士が数人で術式を用いて鍛え上げた騎士用の剣が少しばかり歪んでしまった。
「――――だが、斬れる」
斬撃の衝撃を殺しきれずに空中を投げ出されながらも、ニィグスは不適に笑む。
金属製の巨人の右腕は肘あたりを半ばまで断ち切られていた。無意味なまでに人を模していたのが災いして、肘から先はもう動かない。
『――――おぉ？右腕がやられた……！』
やられたくせに妙に嬉しそうなエスティの声。
それに続いて「ガシュ」と何かが外れる音がして巨人の右腕が肩から落ちた。機能停止して邪魔になったから腕を分離（パージ）。
その作業を見届けずに無理な姿勢で着地したニィグスはすぐさま走り出した。
次の狙いは頭だ。
もちろん巨人だって黙って見ているわけではない。
『次行ってみようっ！』
巨人の身体がぐぐっ、と大きくたわむ。そして跳んだ。全ての動作が大げさなスケール。
早い。
そのまま倒れるようにして小さな目標（ニィグス）へ殺人的というよりも破滅的な質量攻撃。そのまま巨体が持つパワーを遺憾なく発揮して左だけになった大きな拳を振るう。瞬間的に音速超過。
……だが騎士とは身体能力、格闘技能を対城級（レベル）まで鍛え上げた超

人である。
ニィグスは凶暴な笑みを浮かべる。
迫り来る大質量。———その巨大な腕に、彼は飛び乗った。槍の上に乗るみたいな芸当で。
たたっ、と左腕を駆け上がる。巨人の肩口まで走りきる。
下から振り上げる動作で、だた軽くてひたすら硬い事がとりえの愛剣を叩き込む。
三度。
巨人の頭部がバッサリと大きく裂ける。三度も斬られてズタズタ。
『くふふ……！頭なんか飾りだ？！』
頭部がやられたところで全停止なんかしない。ちょっとセンサー系がやられただけ。さすがにそこまで無意味に人に似せてはいないのだ。まあ、飾りがどうのとか言う以前に金属製巨人（こんなの）など使っている時点ですでに遊びでしかないのだが。
そんなワケで頭無しの巨人は俄然、元気に暴れる。
「この、戯けがっ……！」
『超振動』
ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴッ。と昆虫の羽音のような音。ニィグスは掴みかかってくる左手が小刻みに振動しているのだと看破する。
衝撃。
触れもしていないのに空気から伝わる衝撃だけで全身の毛細血管が破裂。特に目と鼻、耳のダメージが甚大だった。眼球は破裂し、鼓膜は破れ、全身の毛穴と言う毛穴から血が洩れ出てくる。あいている手でかろうじて左の鼓膜だけは守っただけだ。
肉体の制御を失って、落下する。いきなり暗転し無音になった世界に戸惑って何も分からなくなってしまった。
頭から地面に激突する。それだけで死ぬほど騎士の身体はヤワではないが、それでも息が詰まる。
「———がっ、は。……くっ」
地面に転がったのはほんの一瞬だった。眼球も破壊され、耳も片方

しか働かなくなったと言うのに彼はすぐに立ち上がった。優秀な騎士は相手が見えずとも戦える。
そして彼は優秀な騎士だった。
気配だけで周囲の状況。相手の動き。それらを感じ取り必要なように彼は戦う。
『おいおい、――――まだやるのかよ……！』
やり過ぎた、と反省してたエスティはさすがに驚いた。いくらなんでも戦闘続行は不可能だろうと高をくくっていたのだ。
「この程度では、――――まだ負けた事にはならん……！」
常人なら発狂するような痛みに顔をしかめるだけで耐えながら言う。
『やるねぇー。俺としちゃあこれ以上は結構、洒落になんないのだけど』
「問答無用ぉぉっ！」
剣を抱えて這うように疾走。落下地点は敵のすぐ近く。だから瞬きの間に接近を果たした。
斬る。斬る。滅多切り。
足から輪切りにするような気持ちで斬る。
『む』
金属巨人は抵抗する為にニィグスを軽く踏みつけようと足を上げて。
『うお、おお？』
――――コケた。
ずずーん、と音を鳴らして倒れる巨人。もちろん、ニィグスは戦場で転ぶような間抜けに手を抜くつもりも、そんな余裕もない。巨人の手足をどんどんぶつ切りに捌いていく。
『わ？わわ――ザザ――ブッ』
さすがに巨人は機能停止。
そこでニィグスも力尽きたのかぶっ倒れる。手に持った剣はすでに過剰な仕事のせいで刃こぼれだらけで湾曲してしまっている。
「――――――さすがに、くたびれた」
へたり込んだニィグス。これ以上はもう動けそうにない。

――ガンッガンッ。

ガコン。プシュッ。

疲れきったニィグスの目の前で巨人の倒れた胸部が開いた。――

エスティが出てきた。

「あーあ。オシャカになっちまった。……やれやれ」

ちぇ、と残念そうに舌打ちするエスティ。

「普通は乗り手（なかみ）もグシャグシャになって然るべきなんですけどね。私が処置をしておかなければ主人も死んでいます。――そもそも持ち込む異物は最小限にするように言っているでしょう？あまりやり過ぎると斥力に始末されますよ」

「お、ソォ。早いな。もう片付いたのか」

エスティは新しく現れた気配に、親しげに話しかける。

「当然です。主人みたいに遊ばなければいいだけですからね。それより、本当に異物を持ち込むのは極力避けてください」

「ん、まだ大丈夫なんだろう？」

「限度はあります。斥力が働いたらどうするんですか。私たちより《世界》のほうが存在として上位なんですよ」

ボロボロと倒れたニィグスはしかめ面になる。エスティは未だに健在で、見えないから分からないどうも仲間まで出てきたらしい。

「よぉ、騎士さん？」

斬りかかった。

痛む身体を鞭打って、血が噴出そうが無視。断裂かけた筋組織がぶち壊れるが、知った事か。

瀕死だろうがなんだろうが斬撃の威力はさして変ることはない。死にかけの身体を無理やり動かしたて相手に切りかかる。

「危ないですね」

剣が止められた。何か粘土のようなものにぐにゃりと剣がめり込んだ感じ。

ニィグスには見えなかったがソォが不可視の障壁を展開したのだ。
実際の所、能力値で言えばさっきの金属巨人なんかよりこの白蛇は強力で万能な『装備』である。
「……っ！！」
粘土の感触が一気に硬化。力を入れて押して引いても動かない。瀕死の、生命としてぎりぎりの最後の全力を入れているのに。
「倒れなさい」
「ぐぅっ？」
ぐるん、と身体が重力を無視して回転し、無様に転がってしまう。あまりにもあっけない。何をされたのかも分からなかった。抵抗も出来ない。ただ実力差だけをひしひしと感じる。あの巨人人形なんか使わない方が強いなんて……。
……ああ、殺されるのか。
相手は強く、自分は弱かった。それだけの話。
「いいえ、違いますよ。私たちの存在は貴方にとって強い弱いではなく、不運の類です。貴方にとって我々はどうしようもないもの、特異な例外なんですから。出会ってしまった運のなさこそを悔やむべきでしょう」
誰かがニィグスの考えを読み取ったように言う。最初のエスティの口調にそっくりだった。
「でも俺にとってこれって貰い物の力だから自慢にはならないか」
「主人。それは当然です。一種の幸運ですよ。――――おや？」
ソォが突然、街のほうへ顔を向けてひとつ頷いた。
「――――……あちらでは決着がついたようですね」
「へぇ？じゃあ状況は終了したか」
くっくっと笑い声。
踵を返し、遠ざかろうとする気配がした。
「……待て」
「うん？」
ぴたり、と足を止めるエスティ。

「何故、殺さない」
「死にたいのかい？」
「理由も分からずに生かされるよりは、な」
「仕事はお互いに終わった。俺は興味の対象（サナリエ）を守護したし、お前は雇い主が死んだから仕事は契約不履行で終わったんだ」
「――そうか、雇い主は死んだか」
何故かそれが嘘だとは思わなかった。とても素直な納得した。不思議な心境。
「ふくく。納得するんだ？まあ、いい。お前の雇い主はどうやら暗殺者にやられたらしい」
「……だから護衛をつけろと言ったんだ。あの愚か者め」
舌打ちする。あの馬鹿貴族は雇った三人の騎士の全てを外に出してしまっていた。だからそれなりの力があるヤツが暗殺にでも狙われたら、まあやられるだろう。ニィグスの目に見てもあの貴族の危機管理能力は低すぎた。
「で、どうする？まだ続けるか？」
「いいや、もう十分だ。俺は、ただ働きは御免だ。――決着はつけたいが、それだって仕事あってのことだ」
もう殺し合いを楽しみたいなんて気持ちはなかった。
――だってそうだろう？何かをし合うにも同じステージに立っていないのだ。こいつらは敵とかじゃなく自然災害のようなものなんだ、ニィグスはそう理解した。
「言うねぇ。さすがは仕事人。――――敵対しないならその傷、どうにかしてやろうか？」
「いらない。これくらいならどこかの医療を担う魔導士にでも金を出せばどうにでもなる。貴様こそ俺の事は、本当に殺さなくていいのか」
「――――、殺したいほど君に興味はない。もう」
「……そうか」
それはとても素直で残酷な、心からの告白だった。エスティにとっ

てニィグスはただの通行人Aになった。たった今、こいつにとって自分は生きていようが死んでいようがどうでもいい存在になったのだ。

「じゃあな、騎士。もう会うこともないだろう」

くっくっと笑い声がして、エスティの気配は完全にニィグスの傍から消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5309a/

異界歩き

2010年10月28日07時35分発行